

光明第四号

敢えて問います。

- 一、一日に何程宛、自分を忘れるほど、全自我を活躍させたことがありますか？
- 一、一日にいくらづつ人の知らないよい事をしていますか？
- 一、光明を読んで何とも思ってもせず、わからないことも無く、あつても問いもせず、「とてもいいかん」と暮してはいないか。
- 一、出すべきものを出さずにはいられないか。借りて来て返すことを忘れているものはないか。恩を受けて、礼を言ったか。人のために泣いたか。弱い者のために悲しい者のために祈ったか。
- 一、妹らよ、貴女は処女でしょうね？ 処女の誇りが知れましたか？ 女子でありながら、みだらな卑しい事を口に出しはすまいね？

巻頭の叫び

- 一、春が来た。暖かい、鳥の囀る、花の咲く、草木の芽が伸びる春が来た。嬉しい、ああ嬉しい。何かしら有難い。
- 一、心なき者よ、花に酔い、酒に酔い、山にうかれ、河にうかれよ。僕らはあの木の芽の様にのびなければならぬ。あの暖かい春風の様に、世の人を幸に、世の中を平和にしなければならぬ。
- 一、如何な逆境に立つても私は誰をも恨みはしない。逆境は天の試練であつて、ここですと歯を食いしばつて努力すれば、天は僕らに力と歓喜とを与えてくれる。
- 一、僕らが嬉しいと言うのは、金があるからではない。位があるからでもない。智慧があるからでもない。ただ「人」だからである。僕が「人」だからである。人としての価値が誰にまけていようぞ。
- 人が狂風や光明を悪く言えばよい。その時あなたもそれを聞けばよい。そして、光明団をにげたい心になればよい。後には「真の人」のみが残るから。
- 倒れた後での杖や、死んだ後の年くりは何にもならん。人生の半を過しても救われていないなら、自分を救うほどの勇氣も出なくなる。若いあなたよ。今の内に、ほんとの自分を知っておけ。
- あなた一人で結構です。あなた一人は他人のことを言わないで、じつと勉めなさい。

心の感応

何時だったかある婦人雑誌に、心理学で有名な福来博士が、死ぬ者がその死を知らせた事についてたくさん面白い話を出しておられたのを読んだことがある。その中

に、今にも死にそうな病人が一心になつて自分の親を見たいと思いつめていたために、その親に子の姿がありありと見えた。親は何でも不思議だと思つていると、その子の死んだ知らせが来る。後で様子を聞くと前から親が見たいとしきりに言つていたという事や、その死んだ時間と、姿が表われた時とが同じであつたことなどが解つた。こんな話がたくさんあつた。これは即ちその子供の心が親にとゞいたので、こんな心の働きを感応というのである。しかし、心の感応はそんな時だけではない。

僕とあなたとの間にもこの作用があります。あなたが光明を読んで嬉しい―と思つてニコツと笑顔になる。あなたが度々していた悪いことをすなと書いてある。と、あゝしまつたと思つて悪い顔をする。その他泣く人があろう。怒る人があろう。しかし、あなたが見ているものは紙の上に写つた字だけでしよう。何故字を見て、嬉しかつたり、悲しかつたりするのでしょうか。それは、その字を通して、僕とあなたとの間に感応の作用があるからです。だから僕が嬉しいと思つて書き、救いたいと思つて書くならあなたにきつとその心がとゞくのである。

昨年の夏僕は親類まわりをした。数年間行かなかつた伯母の家に行つて見ると、子供だけいたので座敷に通つて休んでいました。その内に伯母は帰つて来たが、僕が来ていることを聞いて、座敷に来たが、見るとすぐ、「無事な顔を見て安心した、もう挨拶はしますまい、よく来てくれました。」随分呑気な伯母もあつたもので五六年目であつた挨拶はしないで済んだのです。しかし、僕は伯母の顔を見ただけで、嬉しい！ なつかしい！ 感じが、心に一ぱいになつた。血の続いている真実の伯母の心2からの「ああよく来てくれた、見たい見たいと待つていた」という真心は言葉に出さないでも僕にはよくわかつたのでした。これは即ち伯母の誠が感応によつて僕の心にわかつたのです。

これにひきかえて、義理のある間などで、蜜のように甘い言葉で親切らしく言われども一向面白くなくて、早く帰りたくなるようなことがある。いくら口では親切らしくお上手を言つても、もし心の中に「面倒な奴が来た、早く帰ればよい」と思えばその心の作用はすぐ知れて、来た者はとてもよい気持で永くいることは出来ない。感応の理は恐ろしい。商いをする人よ、もし店を繁昌させたいなら、心から「お客様は家の宝だ」と思え、そして如何なる時にも、たとえ一銭の物を買つてくれても心の中には「有難う御座います」と思え、それはきつと感応の理によつてそのお客の心の中に「気持の好い店だ。今からはこの店に来よう」という考えを植えつけるだろう。景品つきの大安売りなどよりずっとよい広告の仕方である。

安田善次郎翁が妻を貰うのに三ヶ条の条件があつたが、その中の第一は「お客様を大切にすること」というのであつた。商売をするのにはいくら店は立派でも客が来なければ駄目である。安田翁の店では何はさておきお客様を大切に、というので、客には客の言う品物の内で一番よいのからよいのから選つて売つて、その上心からのお礼を添えて売つた。だから「人形町の妙な店」の名が出たのである。

アメリカのワナメーカー氏は品物は売らなくても、親切だけは売れと常に店の者に教えていたということである。商いで成功するかどうかはここにある。一家内の中

でももしあなた一人が心の中に、面白くないこと、嫌なことや悪いことを思っているなら、いくら言葉には出さず、顔の上には出さないでも、一家内の者にはすぐそれが感応して皆の者を不愉快に日を暮させる。だから一家内には一人でも心の楽しくない者があつてはならぬ、とりわけあなたが一家の主人となり、主婦となつたとき、小さいことにまで怒つたり泣いたりすれば一家内の者は氷にさわるような思いをしなければならぬ。即ち家庭の幸福は根本からなくされてしまわなければならぬ。もしあなたが心の冷たい愛の泉の涸れた人であるならば、あなたが行くところはどこでも墓場の様な冷たいところと変えてしまふだろう。

人間は皆どこかで他の人と一緒に、集つて暮さなければならぬものである。もしあなたの心の中に自己の幸福を喜び、人を愛せん、人を慰めんと燃ゆる心があるならば、あなたはその燃ゆる心の力によつて、あなたが行く社会を極楽と変えることが出来る。あなたはまずその冷たい心を、目覚めることによつて救え、救われよ。そして、常に、熱愛を以て人に接して見よ。その家庭は、楽団になろう。その社会は極楽になろう。あなたに接する人は皆その熱愛の感応によつて、清く温かく尊く、仕合せな者になるだろう。情のない者は、この世を冷たく変える鬼である。

心の奥を人が知るまいと思うな、僕らは、静かな水の上に砂つぶを落した時、まるい波がだんだんと伝わつて行く様に、この人生に、温い清い情の一滴を落すか、冷たい邪見の一滴を落すかによつて、鬼ともなれば仏ともなる。仏となれ、鬼となるな。

思つたり言つたり、したりした事がその場かぎりで消えると思ふな。人を憎む心も愛する心も、その心は感応によつて、きつと、他の人に知られてくる。だから口さききばかり、お上手ばかりならべて、それで人の心が動かせると思ふな。お上手は口先で人を釣ろうとする虚偽である。人に嫌な感じを与える外何物もない。あなたが言つた一言は、聞く人の脳の中の蛋白質に変化を与える。その変化は一時にその人から取り去られるものではない。以後その人の一生の間、どこかで出て来るのである。一度聞いた見たりしたことは忘れたようでも、それは心の奥にひそんでいるので、いつかは不知不識の間に出てくるのである。我らの知識というのは、生まれてから今まで、見たり聞いたりしたものがたまつたものを言つたのだ。だから、もし、あなたが悪いことを考え、悪いことを言い、悪いことをするならば、たくさんの人に伝わつて悪い影響を与えるのだ。即ちあなたがいる近方は皆腐つた汚い社会とならなければならぬ。

私だけが悪いのだ、人に迷惑はかけないと思ふな。もしあなたが救われて、正しく、尊くなつて生きるなら、あなたには、目に見えない光明が身から出て来て、その光こそは、四方八方にかがやき、一口ものを言わなくても、その力によつてあなたがいる地方は、清く尊いものにかえられるだろう。僕らは、まず人になつて、幸福にならねばならぬ。そして、あなたから出る光によつて、世を救い、清めねばならぬ。悪に引きづられている哀れな者よ、さめよ！

若き同胞よ(4)

七、志は天にとゞけ 手は地をかけ (下)

前から言ったように、青年には、その心中に何か理想がなければならぬ、理想があつてそれに向つて突進しなければならぬ。「その理想への突進」には大なる努力と忍耐とがいる。忍耐と努力とによつて、一步一步築きあげて行かねばならぬ、即ちここに「手は地をかけ」ということがいるのだ。

「僕には大なる理想がある。こんな小さなつまらないことをしている身ではない。こんな馬鹿げたことをする自分ではない」という青年もいる。「五銭や十銭のお金をためたとて、たいしたことはない」と言っている者もある。しかしながら、僕らには大なる理想があればあるほど、小さい事をつとめなければならぬ。小使いとして使つて見て働けない男、小便くらしいの事と言つて働かないようなずるい人間がどうして、それ以上の責任ある地位に立たされた時役にたとう。いやしくも自分の務なら、如何なる辛いこと嫌なことにも笑つてかかる人でなければ、成功とか、理想とか思わないことである。豊臣秀吉のことを例に引くのは極端かも知らないが、秀吉は最初は草履取りであつた。織田信長についていて、草履取りをしているとき、もう、天下第一の草履取りであつたのだ。冬の寒い夜など、草履を懐に入れて温くして待つていて、信長にはかすほど、その心は真面目であつた。だからこそ、段々と重く用いられるほど、立派な仕事が出来たのだ。

ある朝、信長があまり早いから誰もいまいと思つて、「誰かある」とやれば「木下藤4吉郎これにあり」と出る。一寸のすきもなく働けばこそ、重くも用いられるし、仕事も出来たのだ。秀吉が関白太政大臣、太閤など、位人臣の栄を極めたのは、草履取りの低い身分の時、最もよく真面目に働ける人であつたからである。「僕は大臣になるんだ」「おれは大将になるんだ」という青年が、書記に使われた時、一兵卒になつた時、どうも思うようにならない、つまらない横着な者であるならば、大臣、大将はおろか、書記、兵卒の内でも頭にはつけない。「僕は数万円のお金を貯えなければならぬ」と志を立てながら、「五銭十銭は」というので平気で使う様な心では、とてもとてもお金をためるところか借金せねばかしこい位である。

富士山も砂つぶ一粒づつから出来ていることを考え、大海も一滴づつの水の集りである事に気がついた時、僕らは如何に大きな望を持ってばとて、今自分がしていることが確実に、本気で出来ず、なるだけ時間を惜しんで、孜孜として勉めるのでなければ、成功とか成就とか言うことは出来ない。

理想は天にとゞくほど高くても一分一分とそれに向つて努力すれば、現在の自分よりも進んだ者になることは事実である。しかしいくら小さな望みを持つていても、一日一日とそれに向つとめないでいるなら一万年待つてもその望に到着することは出来ない。さすればその理想は理想でなくて空想である。だから理想が、理想となるのも空想となるのも、現在忠実に努力し続けるかどうかによつてきまるのである。

若い弟よ、それがもし学生であるなら一日一日の英語の一単語を確実にひけ、もし汝が百姓であるならば一本の稲穂でも粗末にすな。あなたがもし、大工であるなら、

一つの孔でも丁寧に彫れ。ノートの一冊すら終まで始末よく使えない学生が大人物になれるならおかしい、稲の穂一本だからと平気で粗末にしたり、牛一匹立派に飼えない百姓が、借金が出来なければ結構である。鑿の孔一つ立派に彫れないで、立派な様梁になれたら鼻が笑います。

わかりましたか。理想は誰もお待ちなさい。理想がなければ、進歩もなければ、幸福もない。しかしながらもし、現在の目の前の事をおろそかにするなれば、理想は空想にかわつて、やはり進歩はありません。ああ弟よ、人として生き得るならば真面目に人にも使われて見よ。馬鹿げなと思うことでもじつと本気でしてごらん、人になれます。わかります。貧しくて賤しくて、弱い僕らには、理想が心の中に燃えていて、この手は、この足は、この体は如何なる辛苦でもすることが出来る、ああ何という幸福だろう。

春！

春！ 何という嬉しい声でしょう。春！ 嬉しい春。のどかな春。暖かい春。万の生物が新しく活動する春。何度言つても何度考えても嬉しい春であります。

雪や霜という真白い清い衣物をぬいだ春は、天地の慈恵によつて、長い冬の眠りから覚め、愉快にその活動をはじめます。蕉や菜などの芽が出はじめました。蓬ももえ出でます。土筆が堤にならんで出ます。野にも山にも草や木の芽が出ます。散りか5けた梅の木の側には、水仙の真白い花が咲いています。

間もなくお山の上や堤の上や深山の奥やお宮の森などに、雪の様に、雲の様に、桜の花が咲くことでしょう。大和魂の表徴！ 私らの心のような花、あの桜を置いて何が美しいだろう。夢の様にかすんだ日に、ヒラヒラヒラツと数十数百の花びらが雪のように散る。

ああ春！ 美しい春！ 春！ 春、春、何度思つても嬉しい。

あたたかい寝床の中で楽しい夢に目をさまして、健全体をピンとおどらして起きあがると、雀の鳴いているのが聞こえます。外をのぞくと、春雨が静かに降つています。遠近の山には霞がかゝつて藍色にぼかされています。寒くもなければ暑くもない、たゞ気持よくあたたかな春雨の朝、何と気持ちのよいことでしょう。二分ばかりのびた柳のきれいな緑色の芽が洗われています。そして、伸びているのが見えるやうです。一雨ごとに花が咲きます、芽が出ます。

春！ 美しい春！ 万物が活きる！ 何度言つても春は嬉しい。

若い私ら。人として生きようとする私らがこの活気のある春、何もしないでいられよう。僕らの胸にも赤い赤い血潮がわいて来る。五年あるいは三年二年勉強学んで、もう卒業証書をもらつて学校を出るのだもの。六年の間通つた小学校も出ていよいよ自分の好きな商業を習んだもの。鍬をかついで田圃に出て見ると、二寸ばかりに伸

びた麦は色青々と出来ている。この田から十俵、あの田から五俵、立派な麦を取れるのだもの。胸の血がわかないでいようか。

僕らは真の人として生きようかとつとめる人だ。

そして、万物の新しく活きる春だ。

おお、この春にあえる我らは如何に幸なことだろう。

『がんの羽音』の中から

三十余年は、ああ夢でした。『光明』をゆるゆる拝読つかまつり身にしみじみとこたえて、嬉しく実には山々のお札を申し上げます。実は私事生れつき愚者であります。せに、胸にもちて、くよくよ思ったり、他人にあてこすることが嫌で、つい露骨に申します。他人様に悪く思われたり言われたり嫌がられることも御座います。もともと無教育な家庭に生れ、私も無教育なために、なお又、神仏を粗末に致しました報でか、筆紙にもつくされぬほどの笑いの種となりました。色々の煩悶にも苦しみます。悲しいにつけても近頃は未来のことなども考えられ、どうしても救われなければならなくなりました。私は私の罪悪を引き受けて共に泣いて下さる方はないものと日夜職業も忘れて狂い回りました。

しかし、ああ、しかし、本日ただ今、『光明』の尊さがわかりました。私の胸にもゆる恐しき炎熱の焰、求道をさまたぐる悪魔のために、その苦しき中を、人の言の葉も意にかけず、苦しみつつも四方にかけまわりましたが、『光明』の中に言つて下さった6ことの尊さを知っては人生は自由の樂園です。ほんとに嬉しうございます。もし先生がこの拙文の一字でも御味わい下さらば、こんな嬉しいことはありません。私は自分では正しい者のようにしていましたが、私ほど偽善者はありません。世を恨み人を恨んでいたのでした。私らは、天地の運行や、四時の遷り変わりを自由にすることが出来ないように、自分の兄弟も朋友をも思うようにすることも出来ない。否、他人はともかく、この私自身さえ、善に近づき、悪を離れたいと思いましたが、なかなか彼に近づき此に遠ざかる事が出来ません。

しかし私はつとめなくてはならないと存じました。私の身に悪いことがあれば御容赦なくご訓戒を願います。少しも腹は立ちません。恩を受けても感謝したことのない恩知らずでございます。他人には迷惑をかけてはばからなかったのです。もし真如の鏡に照らされれば、恥かしくて恥かしくて、自分の親、自分の子供に対しても申しわけなき私であります。ああ三十余年は夢でありました、何も零でありました。しかし私の心はその夢から覚めて、尊いものに進まねばなりません。(雲の女)

□俄悔は救われる第一の道である。僕らは必ず一度は心からざんげして、真の人にならなければなりません。「雲の女」様、心からのさんげをなさって、人として生きようとなさる、嬉しう存じます。どうか真面目にお修養なさい。(狂風)

野菊様の清い心。

「三号にて承りませば、いづれ光明を印刷になさるとのこと、本部では御費用の足りない事でしょう。わずかではございますが、〇〇錢、婦人画報一ヶ月休んでお送り致します。どうか何かの御費用にあて、下さいませ」

□ 有難うございます。お金はいくらでも、その心が嬉しうございます。たとえ十錢でも旅の方五人にお送りする郵便賃になります。四十錢あれば二十人のお方にお送りすることが出来ます。もしその二十人の中に一人でも、『光明』を読んで、「あゝそうだ」と感ずる方があつて、その方が幸福になつたら何とします。これ見よがしの百円より、あなたの〇〇錢がどれだけ、光があるでしょう。

人間らしい味

授業を五時間しました。三時頃から入学準備のための余課を一時半乃至二時間やります。事務室にかえつて、もう間もなく、先生方は帰りはじめられます。私の仕事をする時にはもう暗くなります。それでも事務をほつておくことは出来ません。やつと私の仕事をして帰つて来ますと、お夕食をとります。これが三十分、新聞でも見ていますと、入学準備のために勉強する人がきます。それに色々お答えしつつ、光明団の仕事をします。新聞を見ます、それらの人が帰るのが十時から十一時頃です。その後で私は書物を読むか、原稿を書かします、そして、日誌をかいてしまえば、七十二時になります。そして朝は六時半におきます、そして書物を読んで、朝食を取つて、学校の仕事をします。ゆつくりする時間はとてもありません。それに入学する人の手続きやなどでも本年はたいへん手かずのかかるのが多くて困りました。三月という月は、日曜とて、二日以外に九日も十六日も二十三日も皆何かの用事で自由にはならんことになっていきます。忙しい、真に忙しい。朝六時半に洋服をつけてから夜十二時まで和服にも着かえず、お風呂にすら、十五日や二十日行かないことは時々あります。

幸福です、忙しければこそ幸福です、仕事のない人がつまらん遊びをしたり、退屈など言つて大切な五十年を無駄にすこす心配もなければ、人の悪口言つている間もありません。その上なお嬉しいのは、毎日五百メートル位の競走の練習をする時間のあることと、光明団や狂風をつまらないものだとか、悪い人間だとか、悪いことをしているとか、貧乏だとか、家柄が悪いのと言つて下さる方があることです。光明団がつまらないのは、皆の兄弟姉妹がしつかりすれば、よくもなりましょう。狂風がつまらないからこそ立派になろうと、力一ぱいつとめまします。貧乏なればこそ、ついだ洋服を着ても何ともなければ、又貧しい人の兄にもなられます、家柄が悪いと見られればこそ、皆様の内の家柄が悪いから悲しいと言われる方を慰めることが出来ます。愛したい、救いたいと真心から出たことを、かえつて、悪口でお礼のかわりをされる中に立つて見、親切にかえつてたたかかれた時、初めて「人間味」を嬉しく味わうことが出来ました。

弟よ、妹よ、あなたが、親兄弟の側で何の不自由なく、我がままを言っている間とはとても人間味なんかわかつかうか。旅に出て見よ、旅に。食うにも着るにも働かなければならぬ身になり、朋友にも見はなされ、親類の者にも見はなされ、時には又、親にまで敵と見られた時、真実の尊い人間らしい味も力も得られます。しかし、そんな身の上になった時、何人の者がその厳肅な尊い幸福を知ることが出来ましょう。あなたが立派に着かざつたり、お金を湯水のように使つたり、仕事がなく、遊ばれたりするのには、真実の幸福ではありません。着る衣物がなく寒ければこそ、衣物の嬉しきもわかろうし、使うお金がない時こそ、お金の価値も知られます。仕事が次から次とあればこそ、人間に生まれた甲斐がある、目覚めた神霊の力も知れる。幸福になろうと思えば、一度あなたが持つている財産や家柄や名誉や智慧などの上にこびりついている虚栄と自慢の鼻を折つてしまいなさい。

金と、位と、智慧との光があなたの目をくらましている間はあなたが持つている幸福は、狂風が持つている幸福とはちがいます。あなたの幸福はあなた自身の中にある幸福ではなくて、あなたを包んでいる物を幸福と見たのです。それではいけない、それではいけない。あなた自身が幸福のかたまりであり、持主であることを自覚なさい。その時ほどあなたは幸福の大なるものを得たことではないのです。あなたが絶対真実の幸福者となりたいたならば、金と評判と、学問と智慧とにこびりついた執着と、虚栄と自慢とを洗ひ棄てて見なさい。

哀れな傲慢ちきな者に聞いて見たい、賢そうな顔をして威張っている人は、何かがかしこいのだ、強そうな風をしている人は、何が強いのです。自分の僅かの身代や少しの学問のおかげで人を目下に見おろしたり、貧しい者、弱いものの前にみせびらかして、自分自身が賢くなつたと思つている。二人の子供がいた。大きな子が奇麗な絵をもつていた、自慢そうに見せびらかすと、小さい子が悲しそうに泣いた。二人の子供の内どちらが尊い。それとどが違おう、哀れなことには、絵のない子供の方は「馬鹿だ、不幸だ、つまらん奴だ」という人がおおかた皆だ。これでこそ、あなたは泣きたいほど哀れな動物だ。